第21回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第二一回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで二四二名の方から五五四篇の作品をご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十一月七日、渡辺みえこ、五十嵐勉の二名の選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

授賞式は、明年一月二十五日（日）二時半より東京都大田区民プラザにおいて開催する予定です。受賞者以外でも参加できますので、どうぞ御来席ください。

第二十二回「文芸思潮」現代詩賞は、これまでと同じ要領で明年また募集いたします。どうぞ奮って御応募ください。

（「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮）

第21回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

「原米論——咀嚼以前の民俗」
「レクイエム：虹彩の下の解剖」
「ハンバーグ或いは供犠のアルゴリズム」
加藤雅水（埼玉県比企郡）

優秀賞

「雪解けの水シルクロード」「紅椀」
「one scene」　橘いづみ（島根県松江市）

「久遠の手紙」「離散量の行方」
「孤食の叫び」　能塚保幸（福岡県久留米市）

「虹彩の絶滅保護について」「玻璃の祝詞——水仙偏位」「0.25ルクスの腸——粘膜に差す月の粒子」　norik@_K（東京都世田谷区）

「Aspect」「シネステジア クロノスタシス」
「bō、kā」　あらいれいか（宮城県名取市）

「ずれの群れ」「水性生物」
遠藤月尾（東京都府中市）

「ゆきやなぎ——海龍王寺」
「東塔——薬師寺」清水一美（東京都立川市）

奨励賞

「闇夜に香る」「地獄・監獄・天国」
黒田裕美子（東京都板橋区）

「防衛ライン」「傴」「私は燃え上がるほどの暴力であり竜巻である」　佐々木漣（千葉県市原市）

「背筋」「スペクトラム」　ルキア（神奈川県伊勢原市）

「誰もいない水彩画」「水の無いプール」
北村灰色（埼玉県和光市）

「不意打ち」「ヒーロー」「夢の軌跡」
遠藤芳子（東京都狛江市）

「茶房」「非行律」「枯葉」オキラク（東京都世田谷区）

「ユーラシア動物園」「散文」「海を捨てる」
妻咲邦香（長野県北安曇郡）

「すうすう」「ただ雨になる」「雨上がり」
幸地千華（沖縄県中頭郡）

「入相」「窓を拭く」　中村郁恵（北海道札幌市）

「悼み」「光」　杏李　蘭（京都府京都市）

「かさぶた」「プール」「片頭痛」
深町秋乃（熊本県熊本市）

選評

詩・深層の声

渡辺みえこ

今回は緊迫感を感じさせる詩が多かった。

私たちは今、地球環境をはじめ、危うい状況に生きている。二十一世紀はアメリカ同時多発テロから始まり、その後、戦争、地球温暖化、内戦、暴力、難民……など心が痛むことが多い。

詩の根源であるいのちの凝視、他者にかける橋としての発語の震えなどは、自己の存在の場と時代との緊張感からも生まれる。

言語構造への懐疑表現であっても、意識下の噴出としての自動記述的表現であっても、その技法による表現の底には、さらに強い新たな詩的リアリティ、人間存在への問いは必要であろう。

それは詩に向かう「私」の内部の声なき声、黙殺されてきて、言葉を与えられず出口を求めている暗闇の場であろう。

例えばブルガリア出身のフランス哲学者のジュリア・クリステヴァ（一九四一～）の前言語的時期の母との共生関係の精神分析理論、言語を持ったときに棄却された唾液、涎、血などの流動する曖昧なものに満ちている世界に光を当てた言語表現など。

詩は表現しがたいものを言語で表現する困難な作業なので、難解な専門用語や、芸術（美術、音楽……）文学、漫画、ゲームなどからのヒントや引用は注を付け、特殊な読み方をする文字には振り仮名を付けてほしい。

最優秀賞となった加藤雅水氏の「原米論――咀嚼以前の民俗」は、人間の生の根源である食について、ことに日本文化の根底である米というものに注目し、その原初のつながりを詩語で豊かに見つめた。

「レクイエム：虹彩の下の解剖」は、現実感覚を基本にしながら、「多様性」や「性別欄」などの現代に直面している問題を「我ら」と、同時代を生きるものの問題として提示しているのは、詩に向き合うものの責任が感じられる。

また優秀賞の清水一美氏は、和歌の伝統の口誦文化いらいの仮名文字を基調として日本文化を現在の位置から書いている。

日本は、太陽神、皇祖神、巫女でもある女神としての天照大神の神話を持ち、女性的感性の仮名（女手）の和歌を中国伝来の真名（男手）の漢字に対し日本文化の深層を支えてきた。清水氏は、そんな仮名を生かし人間同士の共感、

万物との共生を詩にしている。

国文学者の西田正好は、『日本美の系譜』（創元社一九七九年）で日本のオリジナルな国風文化は女と神が主体であり現世肯定的、神聖楽園、常世の思想で、上代は真言を信じ、四季の自然美、みやび、哀れの美学を持っていた、と記している。

「東塔――薬師寺」では、「み柱の心にひびく／／風の呼（こえ）を／／」と祈りのようなものが、伝わってくる。

同じく優秀賞では、norik@_K氏「虹彩の絶滅保護について」は、静かに変容していく生命の危機感が伝わってくるが、六、七連では「舌」や「胃」などの身体本来の持つ希求を、「わたしたちは光を灯す」と光の方向を示唆している。「玻璃の祝詞―水仙偏位」でも祝詞が逆説的に世界批判になっているのだが、異質な言語の結合にも、底流では、現実世界との危うい均衡を保っている。それらの言語の反響が七連あたりで鮮明な像が現れるとインパクトはさらに鮮明になるだろう。「0.25ルクスの腸―粘膜に差す月の粒子」は、三、四、五連の身体感覚が、現実感を持ち、norik@_K氏独特の詩になっている。

原初の人の言葉は他者への呼びかけとして始まり、自然や神々への賛歌、歌謡、相聞歌、挽歌、レクイエム、などに発展もしていったのだが、詩を書くということは、そのような言語の歴史にも参与することなので自己の身体の欲求に耳を傾け、朗読してみると流れの違和感、また意図に沿っているかなどに気付く。現代詩は、黙読する詩になってしまっているが、言語の伝達という原点に還ってみるということも大事だ。

また優秀賞、橘いづみ氏「雪解けの水シルクロード」は、流れるような語りであるが、行分けの必然性がない行はそのまま続けて大きな流れをつくっていくほうがより効果的だろう。二連目の三行目「気分だった」は心情の説明になるので「思い知らされた」で留めたほうが流れに沿う。

「紅椀」は、女性のいのちと重ねていて暗い紅の輝きが表されている。てらてらしている椀や女性の残りの命は負に扱われてきたので、そういう既成の価値観の補完ではなく肯定にもっていくことも試みてほしい。

優秀賞、あらいれいか氏は、言語が豊富で、多様な言語の出会いが緊張や、輝きも持っている。「bō、kā」は、意味や簡単な説明の注が欲しい。言葉の奔流、スピード感に都市の喧騒を移ろう視線のようなものが感じられる。しかし多くの比喩を使いすぎるとイメージが拡散してしまい詩全体の求心力やまとまり、強さを失う。主張したいイメージを大事にしてそこから広げていく連もあるとよい。一編の詩が言語的に響きあってほしい。

近・現代詩は、近代的個人のものとして、ことに戦後は、戦争協力歌を書いた歌人たちへの小野十三郎の批判なども

あり、七・五の魔、奴隷の韻律、などと伝統的短詩系文学の否定から出発した。しかし戦後八十年、豊かな日本文化の伝統詩歌は私たちの身体の底に流れている。多くの情報を得ることができる現在、近・現代の歴史を踏まえながら新しい詩歌を作っていきたい。

優秀賞の能塚保幸氏も、豊富な比喩で自己の大切な深い叫びのようなものを彫り上げている。

「久遠の手紙」の久遠は、永遠よりも深い古典的概念で、宗教的に重要な言葉だが、様々に使用されてきているので、この言葉は裏に秘めて、自己の言葉で表現して永遠性を出せないだろうか。「暈した引導が削ぎ落ちるように／ここからを　人間でいるために」というような詩情を大事に広げていってほしい。

優秀賞の遠藤月尾氏は、「ずれの群れ」で「グルメレポートに隠された戦争」という私的事柄と人類に起こっている事象を大局的に見ることと並列して差異を出しているのはよい。しかし、生き延びることも困難な人々も多い世界の中で束の間の「平和」な日本の卑近な挿話ではなく、「重ならない、交わらない、一致しない生活」の中に戦時下の人々にも匹敵する重い現実も示してほしい。

奨励賞の遠藤芳子氏「不意打ち」のテーマは、「哀しみ」だろうが、哀しみは深いほど表現しがたく、そのために沈黙に近い表現として詩が存在する。ただ「哀しみ」と言ってしまったら軽すぎる、一般的な「哀しみ」とは違うと、比喩や寓話、叙事詩、などで過去の多くの作家たちは自己だけの深い悲しみ、苦しみを書いてきた。詩を選んだからこそ沈黙の中にある著者だけの「哀しみ」を、哀しみという言葉を使わずに表現するということは難しいだろうか。例えば「夢の軌跡」の、夢のひとつの情景を活写してみることはできないだろうか。

同じく奨励賞、中村郁恵氏は、自己の日常の中に詩情を見出している。どんな状況の中でも詩を生き、詩を見出すことができることを示している。「入相」の三行目「熟れを知らない」のあとには「桃の」を補って読まないと文として不安が残る。「入相」を人間のつながりと重ね最終連に向かう表現が良い。「一続きになった暮色の真中で／空の手指と／海の手指が／柔らかに絡み始めた／」と比喩的表現の後に以下のような即物的現実の表現と重ねることによって、鮮明に情景をイメージとして描き出せる。「エンジンをかける／私を待つ人のいない家へ／ライトをまっすぐに向ける／／」。古代エジプト神話で、太陽の男性神ラーが、夜、女神ヌトに飲み込まれその胎内を進み、そこで自らを再び創造し、翌朝再生するという古代エジプトの人々の想像力も思わせる。

奨励賞、黒田裕美子氏「闇夜に香る」は、百合や子犬に主体を託すことにより、距離を設定し、自由に語れるようになり、表現に深みを与えている。「地獄・監獄・天国」は、狂おしさがよく表現されている。「私の脳天を打ち砕く」というと外側からの一般的表現なので、著者の内側の感覚をもっと表現できないだろうか。「絶頂地獄」も類型語になってしまうので、状況を描写して読者が多くのイメージを持てるようにするとよい。「阿呆」は差別語なのでその人の状態で表現したほうが良い。「魚の目をした飛べないアヒルたち」という生きもののこのような表現を膨らませて書いていくのはどうだろうか。

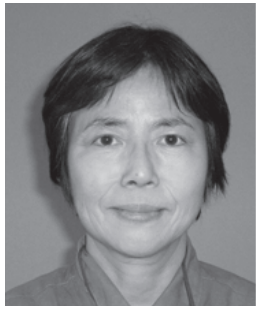
奨励賞、オキラク氏「茶房」は、詩行が的確でよい。「水の中で結われた髪／聖なる知恵」なども豊かなイメージなので、次の連か最後の連かにつながるとよい。最終行の「私の片隅」の「片隅」についてもう少し書き込んでほしい。

「非行律」は、「僕らは乾いていく」が、多面的に照らし出され迫ってくる詩法は水を飲んでも乾いていく状態の表現には効果的だが、「でもそれが好きな人もいる」という結び方は、強い流れを遮断してしまうことにはならないだろうか。

奨励賞の妻咲邦香氏「散文」は、日常と幻想が混ざり合って現れる技法は現実感があるが、最終行の「予想通り、改行の群れ」は、飛躍して観念的になってしまっているのではないか。

佳作に留まったが、印象に残る作品も多かった。遠藤創氏は、「言葉」の「昼想夜夢」は意識下の欲動が現れるとしてフロイトは「夢判断」を書いたが、その夢を具体的に表現できないだろうか。

今回もそれぞれの生きる場から多くの声を届けていただいた。書き続けていってほしい。



渡辺みえこ

わたなべ　みえこ

日本女子大学、文教大学など元大学講師。詩誌「POISSON」同人。日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。
2009 第59回H氏賞詩集賞選考委員。
2015 第47回横浜詩人会賞選考委員長。
詩集
『耳』詩学社 1972。『喉』思潮社 1982。『声のない部屋』思潮社 2001。『水の家系』南風プレス 2002。
『空の水没』思潮社 2013（第十回日本詩歌句大賞受賞）。
文芸評論『女のいない死の楽園―供犠の身体三島由紀夫』パンドラカンパニー刊　現代書館発売 1997（第一回女性文化賞受賞）など多数。

言葉に力がある詩

五十嵐　勉

第二十一回目の現代詩賞は応募者数も二四二人と増えたばかりか、全体的にレベルも高くなった。最終選考にどれを残すか、予選の段階でもいい作品が多くて選ぶのに苦労したが、最終選考でも、差がわずかだけにたいへん難儀した。もともと最終選考の基準は5点満点評価のうち、4点以上が優秀賞、3点以上が奨励賞という目安があるのにもかかわらず、3点以上の評価は四〇人中三四人が該当した。ほとんどが奨励賞以上の評価だったということになる。まさに鈴なり状態で、結局どれを落とし、どれに泣いてもらうか、悩んだ選考となった。また上位の優れた詩群も豊かで、力量を感じさせる作品も多く、実に充実した選考となった。

私が特に言葉の力を感じたのは、加藤雅水氏の「原米論――咀嚼以前の民俗」「レクイエム：虹彩の下の解剖」である。「原米論――」は特に言葉が米や田の土の領域を舞台にした、現代の都市世界や電子感覚から離れたところから造形しているのが新鮮であり、また意表を突いていた。それらは荒廃する農業やその土地に眠っている人間が血や汗で繋いできたものを、現代の便利さや機械的なものへのアンチテーゼとして掘り出し、浮かび上がらせ、なおかつ刃や矢として、現代を鋭く攻撃している。その言葉の鋭利さ、的確さは、力強く、歯切れよく、明晰に、現代を切り、刺している。田や米の背後に埋もれていった人間の本来の素朴な生々しい姿を剔出して止まないそれは、躍動的なリズムを伴って、批判を運び、告発する。埋もれていったそれが掘り出され、化石のように露出すればするほど、現代の背理は鮮やかになる。ここに詩の告発と鳴動がある。言葉の雄勁な力を感じた。

また「レクイエム：虹彩の下の解剖」は、皮膚などの生物的生々しさを土台に、男女の性別や多様性を乗り越える生命観を響かせている。爬虫類の鱗になぞらえた多様性の模様は、絶えず脱皮する変化と旺盛な復活力を提示して、現代の性区別や生命力の貧困を揶揄する。都市生活で区割りされ擦り減った軟弱な生命ではなく、もっと本来の暴走的なまでに横溢する存在をその皮膚の下に潜ませている事実を開示する。本質を突く鋭さがある。最優秀賞に値する作品として推した。

優秀賞の橘いづみ氏の一連の作品は、これまでの作品よりも格段に鋭さを内包し、それが芯に骨格として強靭な構造を見せていた。言葉が広がりと強さを得たがゆえに、短い行、長い行の大胆な組み合わせもリズムと力を持ち、詩の造形力を深めている。大きな進歩向上がある。この内部展開の広がりと深化は、ほとんど最優秀賞の領域に達しているが、惜しむらくは、例えば「雪解けの水シルクロード」においても、途中に不用意な「あなたがあのときこの肌を掻き抱いたからでした」のような緩い言葉が入ったり、結末に「食べて、生きて、時々は思い出している」のようなぬるい言葉を持ってきて、あえて的を外すような衒(てら)いを示す弱点が見られたことである。三作に共通している最後の行の弱さが克服できるようになれば、頂点に達するのにと、きわめて残念に思った。

能塚保幸氏の「久遠の手紙」「離散量の行方」も、前作よりも先鋭化した力が宿っていた。これらは自身の思考が深化して初めて形象化するものなので、内的圧力が高まったことの証左として、最高賞への肉薄を感じた。ただもう一人の選考委員の指摘されたように、「久遠の手紙」のタイトルにも見られることだが、遣い古されている言葉をそのまま持ってきている油断が散見するところに、もう一つ先鋭化が結晶しきっていない恨みが残った。しかしそのスケールの拡大と意欲の燃焼は確実な膨張を見せている。この持続の向こうに実現されるものを大いに期待したい。

予選としては最高点で上ってきたnorik@_k氏の「虹彩の絶滅保護について」「玻璃の祝詞」「0.25ルクスの腸―粘膜に差す月の粒子」は、卓越した言葉の放射が一つの域に達していて、快いリズムと軌道を持って弾んでいることは、高く評価した。なかでも「0.25ルクスの腸―粘膜に差す月の粒子」は、腸や子宮の粘膜の世界に、普通は馴染まないように思える光を注ぎ込んで照らし出し、昼の都市世界を重ねて浮上させる構造は、斬新で輝いている。この高度な詩の技術に、核となる思いの強さや貫きが込められるようになれば、立つことのできる素質を備えていると見るが、ペンネームが示すように、立つことからむしろ顔を背けて隠れる姿勢が窺われるところに、補うべき点があると感じた。堂々と詩という言葉の格闘に勝負を挑んでもらいたい。

あらいれいか氏も詩の卓越した言葉の放射は一つの域に達していて、特によい「シネステジア　クロノスタシス」は、逆る語群が散文詩の形式のなかで躍動している。言葉が自律的な自由を得ていてそれぞれが飛翔の快い滑空のうちに紡ぎ出され、詩空間の伸びやかな弾力を得ている。この詩も最優秀賞に迫っているが、いちいち辞書を引かないとわからないような外来語の多用が、その結晶度と伝播力を減じている。その点が惜しまれた。他の詩のタイトル「Aspect」「bō、kā」もなぜ横文字を遣わなければならないのか、日本の言葉で多くの人に伝わるわかりやすい普遍的な表現をなぜ志さないのか、必然性が感じられないところに不満を覚えた。しかしnorik@_k氏と同様、修正しなければ最高賞には届かないものの、潜在的な力はある。今

後に大いに期待が持てた。

清水一美氏の「東塔―薬師寺」「ゆきやなぎ―海龍王寺」は変わらない古刹の風景に重ねた古典的格調の世界だが、今回はやわらかな言葉を挿入することによって柔軟な広がりを得ているように思った。その変容は評価した。ただ、一行一行が短くそのリズムが落ち着きと同時に単調さをも併せ持ち、結果的にそれが変化の乏しさとなって、詩の豊穣を拒否している。定型化の陰に隠れ失われるものがある。そのパターン化をどう打ち破るのか、今後の課題であることを再び感じた。現代詩の自由さをもっと生かしつつ、古典的厳格さを出す方法はありそうにも思える。

奨励賞では、ルキア氏の「スペクトラム」「背筋」が、力量を感じた。「陽は寂寥より来る涙の連れ人」「傾く母の光をまとって、日常の気配を撫でた風の、厳かな行方」などの詩句は背後に情緒がまぶされて濃い陰影を造形している魅力がある。ややパターン化の韻律に寄りかかっているところは気になるが、いつかはそれも克服して独自の世界を築いていく気配を感じさせる。私個人としては優秀賞でおかしくなく、推薦の力が足りなかったと後悔している。まだ二十歳なので、これからが期待できる。詩作を持続してほしい。

すでに何度も受賞している北村灰色氏の「水の無いプール」もよかった。言葉の鋭利さは増し、切れ味は鮮やかになっているが、総体としての量がやや足りないのと、発想が類型的になってきていることで、減点された。実力は今回もしっかり示されている。

佐々木漣氏の「傴」「私は燃え上がるほどの暴力であり竜巻である」は言葉に旋風感があり、その魅力は詩を前へ読ませていくが、「フェイクとリアル」とか「AI」とか「PTSD」とか時代に乗った言葉を安易に用いているところに、腰のぐらつきを覚えた。後者のタイトルもやや平板で詩の象徴化のキメをやや欠いている。

黒田裕美子氏の「闇夜に香る」「地獄・監獄・天国」は、絶望的な現実の残酷世界に花の白さを敷衍する発想が鮮やかに広がっている。その対象に救いへの深い希求が感じられた。ちょっとした契機でいっそう開花しそうな気配もある。

深町秋乃氏「かさぶた」「プール」「片頭痛」は清潔感を伴ったシンプルさが、快い響きを奏でているが、現実への掘削力が弱く、切っ先の突き入れの浅さが、白い印象を伴いはするものの、きれいさだけにとどまっている感がある。真に鮮やかなものは、もっと強い現実との切り結びを実現しているものだと思う。詩の鮮烈さは深さに依拠する。深い突き入れを積極的に意識してほしい。

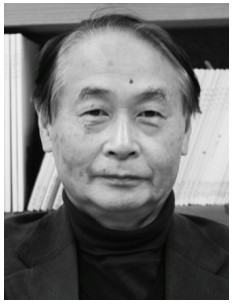
杏李蘭氏の「悼み」「光」は詩の言葉の意外性を伴った弾みに魅力があり、鮮烈な楽音を奏でている。詩才は豊かで、言葉の脈絡の飛翔力には羽ばたきの強い膂力を感じる。今のところ短い詩しか作っていず、量が足りない点は評価が届かないが、詩想を深く整え本格的に構成を伴うものにまで取り組めばかなりなものが実を結ぶ可能性は感じる。

幸地千華氏の「すうすう」は擬態語に新たな意味を付与して目に見えない世界を拡大しようとする意図は新鮮だが、もう一つその擬態語の奥にあるものの構造が見えなかった。また他の擬態語の多用も、同じ理由で構成的に組まれている印象を欠いていた。この奥を解明するには、もっと生命感の横溢が必要で、長さも要求されるだろう。他の二作も短く、沖縄でなければ見えない世界をもっと出してくる必要がありそうだ。

中村郁恵氏の詩「入相」は、これまでキッチンの中から見える世界の多様性を万華鏡のように花開かせていたが、今回の詩はこれから一歩外へ出た世界に挑んでいる。その試みは買うが、ややこじんまりした車窓風景のように感じられる。世界の広さや深さを強烈にぶつけてはこない。これまでの力量からして物足りなかった。

遠藤芳子氏の「ヒーロー」「夢の軌跡」はせつせつたる追慕の情が伝わってきて胸を打たれる。過去を呼び戻し、失われた自己の分身を希求する母性の痛切な声は果てしなく天空を翔け巡る。それは再生の願いとなって木霊し、峻烈な祈りとなって、未来へ橋を架ける。母性の美しさがある。

佳作で涙を飲んでもらった作品の中にもたくさんのいい詩がある。今回はレベルが上がり、佳作・入選の中にも残したい詩、いい詩の言葉がたくさんあった。伝えられないのは残念で謝罪したいが、詩はこの人生と世界の受け止めと企投である。これを大事にすることがまた人生と生きることを深めてゆく。また新たな受け止めの結実がたくさん寄せられることを心から願っている。



五十嵐　勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ

79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞

98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞

2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

他に中篇小説集「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」長篇「破壊者たち」「亜細亜二千年紀」第一部「亜熱帯への召喚」戯曲「ヒロシマ裁判」

他に「小説の書き方」など

佳作

「枯れ庭」「渇きの幻想」「旅路の果て」　来野　怜
「群青の灯」「戻り橋」「落ち葉に」　皐月五日
「越冬」「鬼火焚き」「包」　古賀博文
「海岸線ジ・エッジ」「スターライト」「母なる頓服」　岩尾宏紀
「フラッシュバック」「解離の群像」「生命の行路」　坂本月子
「風葬」「秘儀の夜」「死んだ瞳」　関根　怜
「深淵の愉悦」「修行」「なんとしよう」　小山田良三
「八月の耳」「グレゴール・ザムザの夜」「ユフユフ　とヌトット」　森下万尋
「戦車の轍に埋もれた声」「宇宙におさまるビー玉」　阿部静雄
「かあちゃん」　われもこう
「みどりの日」「スパゲッティ」「とんでいく」　福富ぶぶ
「口に、夏」「温度調節」「ディストピアパレード」　碧はる
「明滅」「痕」「魂柱」　ふきの
「破壊、あるいは再生」「夜になれば」「愛の忘却」　山本雨椛
「新世界」「内海」「黄昏鳥」　インバ
「秋宵」「可惜夜」「海嘯に肆陸い蜘蛛」　胤刹史朗
「祝福の鐘」「黒い夢」「言葉の視点」　篠崎　蓮
「熟れた秋果」「窓辺のラフマニノフ」「冥福の闇」　渡邉章夫
「灰、水」「祈願」「山火事ではない」　光枝初郎
「幻想揺曳曲」「奎星の残光」　柳柳太郎
「水想」「記録の異変」「持続の限界」　砂傍十一
「村八分」「檻」「火」　後藤順
「美しい地獄」「ひとつ星」「告白」　十路田道広
「部屋」「雲のテラス」「ボタンホール」　村上文緒
「宵闇を呼び黄泉を詠む」　曲田尚生
「左手のない猿」「肖像の浸食」「沈鐘」　いもといちろう
「薇式」「海の焔」「泥土」　野葛間
「透明な暗殺者」　珀亜
「青の刻」「障り」「透析」　宮原透夏
「水深ゼロメートル」「無題」「とうめいなバネ」　有原野分
「新世界」「生命の姿」　徳丸魁人
「繰り返される生と死の歴史」「海の底より」　星詠橙子
「統合感覚」「パレード」　梁瀬　象
「散歩する魚類」「東京」「手」　色透ふう
「化かし屋狐の舞踏会」「ド・ゴールの遺言」「天誅」keisei.「バンコクグリッチ」「チェンマイリゾート」「ドッグ・デイズ」　中里一日
「あなたの雨は私の涙」「今は亡き丘のために食べて供養す」「二月十七日のベランダ」　柏村ねおん
「BIRTHDAY」「贈る言葉」「鉄の雨が降る星の人へ」　三刀月ユキ
「かつて報われなかった者たちへ」「言葉」「浸食」　遠藤創

入選

「詩にたいとなげく詩人への出さない手紙」「想い続けたあなたは性的嗜好がちがう」　朝伊ミチル
「確信」「輝く水」「母の面影」　水沢朱実
「波の音」「未だ繭の中で」「執刀」　伊藤裕子
「ストロボ」「惑星」「金魚」　裏路地ドクソ
「あいきょうのあるあの子」「知らないまちで」「汚れた手帳」わらべ進
「眺望」　井上利也
「更地」「交差点」「言わないホテル」　尾内甲太郎
「約束」「紅葉」「化身」　南斗るい
「速報」「熱発」「『お国のために』」　本木晋平
「彼方の人たちへ」　片岡周子
「水仙」　高羽里桜
「毒のかたち」「パレットな、あの日曜日」「消火活動」　片桐こげち
「涙の不可思議な透明」「裸の動物園」「十万画素の印象画」　千葉紫月
「トランキライザー」「雀る」「儀式」　佐山由紀
「蜘蛛」「微睡み」「崩落」　蜃気ポト
「存在のしるし」　橋本沙和子
「別離」「蜉蝣」「廻る」　優木絆名
「薄い膜に映る花」「僕は空に溺れる魚」「ひらき、とじて、またひらく」　政木麻由子
「しんぱい」「罠」「ヘソの緒」　塚　永行
「ことのはこうすい」「ひよこの光」「無数の扉の先」青金せにあ
「愛と呼んだから」「死んじゃえばいいのに」「間に合う」実川阿仁
「メイ」　蒼樹ほのお
「祈り」「卵焼き」　金　栞花
「白面」「波に取り残されたブイ」「ハキダコ」　秋雨一也
「いのりの歌2」　齋藤　礼
「夢食い」「生活」「藍」　富澤あすか
「秤」「風」「朝の輝き」　小川勇大
「おんなごころ」　北あかりんご
「連なる」「午睡の箱」　五十月彩
「水彩」「星」「人間」　遊月飛鳥
「摂動する命のために」　千葉洸之介
「女になるよ」　中立明子
「大富豪」「水と星座」　鹿島　楓
「時に白夜」　奈落
「ありのあゆみ」「すっかんかん」「ときめき」　いまだまりこ
「とある議場にて」「おまえ」　上原愛音